

## 現代文化への視座 シンポジウム「現代文化の葛藤と人間の未来」に寄せて

高木 恒一

### はじめに

本稿は、立教大学社会学部現代文化学科開設記念シンポジウム「現代文化の葛藤と人間の未来 - エスニシティ、都市、環境の視点から -」の概要を記録するとともに、平野健一郎、町村敬志、阿部樹理の3氏の講演を受けて、若干の議論を展開することを目的とする<sup>1)</sup>。

なお、筆者はこのシンポジウムにパネリストとして参加し、3氏に対してコメントをさせていただいた。本稿の議論はここでの発言を膨らませたものであることと、その内容は筆者の個人的見解であることをあらかじめお断りしておく。

### 1. シンポジウムの概要

このシンポジウムは2002年11月30日、午後2時より、立教大学池袋キャンパス5322教室を会場として開催された。教室の定員は230名だが、招待者、現代文化学科学生をはじめとする学部学生や大学院生、市民などで会場はほぼ満杯という盛況であった。当日のプログラムは下記の通りである。

挨拶：現代文化学科開設に寄せて 白石 典義  
(立教大学社会学部長)  
シンポジウムの趣旨説明 佐久間孝正  
(立教大学社会学部現代文化学科長・司会)  
講演

1 「国際文化から見た文化の未来 グローバリ

ゼーションのなかで文化の多様性をどう守るか ]

平野健一郎(早稲田大学政経学部教授)

2 「都市とエスニシティ 姿を現す新しい文化のかたち ]

町村 敬志(一橋大学大学院社会学部研究科教授)

3 「環境とマイノリティ 先住民族の知恵に学ぶ」  
阿部 珠理(立教大学社会学部教授)

パネリストからのコメント

高木 恒一(立教大学社会学部助教授)

田房由起子(立教大学社会学部助手)<sup>2)</sup>

(休憩)

質疑応答

佐久間学科長の趣旨説明では、シンポジウムの意図が説明された。それによれば、まずタイトルに掲げられた「現代文化の葛藤」については、社会学の文脈に引き付けて異文化に接触することによるさまざまな違和感、不安感、アイデンティティの喪失といった、個々人の行動様式に関わる葛藤をテーマとすること、また、「人間の未来」については、こうした葛藤が具体的に発現する都市や、生命の源である自然とのかかわりのなかで今後のグローバリゼーションあるいは多文化化を検討する狙いがあることが説明された。質疑応答ではフロアから北朝鮮に関わる問題や新宿のコリアンコミュニティについての質問が出され、国際関係やエスニシティ問題への関心の高さがうかがわれた。

## 2. 講演を受けて

このシンポジウムにおける3氏の講演はいずれ刺激に富んだ内容であり、多くの論点を含んでいる。また、現代文化に関する認識において緩やかな共通点を見出すことができる。以下では、平野氏、阿部氏、町村氏の講演の順に、コメントしていく。

### 2.1 グローバリゼーションのなかの文化：平野氏の講演をめぐって

平野氏の講演は文化の変容を70年代以降の国際関係のなかで位置づけて論じたものである。

平野氏の立場は、「市場と国家と社会の三角関係」を捉える視点を基本とするものであるが、そのなかでも近代国家の変質に注目している。それは第一には、グローバル化する市場との結託、第二には国家がドイツのガストアルパイターに象徴されるような(エスニックな)異質な集団を抱えるようになったこと、第三には国境に穴が開き、人々が移動し続ける状況が出現していること、といった現象であり、これは「国際的な関係からトランスナショナルな関係へ」という流れとして総括されている。そしてこの流れのなかで、90年代に世界がグローバリゼーションに覆われる状況が生まれてきているという。そのうえで、このグローバリゼーションの流れのなかで、文化の多様性を維持することの重要であるとして、「グローバリゼーションという文化の変化に対して、受け手の側が能動的、主体的に組み換えていくこと」「国家と市場の結託によって社会に押し被さってくる」状況に対して「人々の側もそれに対応」することの必要性を指摘している。

平野氏の指摘する三角関係からすれば、ここで「受け手」あるいは「人々」は、市場でも国家でもない、社会であると考えることができる。いわば、グローバリゼーションの進展のなかで、市場と国家が結託して世界を覆う状況に対して社会が対抗することが重要であるということになる。

ここで社会を、国家や市場に対して相対的に独立した領域として捉えていることに注目しておきたい。そもそも、近代国家は人々の社会生活の基本的枠組みとなっていたものであり、人々の生活は、その中に組み込まれていたものであると考えることができる(例えば佐々木、1998)。ここでは国家と社会は密接不可分なものとして考えられていた。しかし、トランスナショナルへの流れのなかで、近代国家と社会との乖離が大きくなり、その結果として独自の領域としての社会が注目されてきたと言える。このことから、社会を保護するものとしての機能を担っていた国家が、必ずしもこの機能を担わなくなったために、社会は自立する必要性がでてきたということになるだろう。

しかし、こうしたトランスナショナルからグローバルへという流れのなかにある社会には、より積極的な側面があるとも言える。近代の国家が社会を保護する存在であるということは、近代国家が、国境の内側にある社会の成員を「国民」として統合するということである。そしてそこでは、本来は存在している地域の様々な文化を抑圧することによりこの統合を成し遂げてきた側面を持っている(例えばAnderson, 1991=1997)。近代国家が変質し、社会を保護する機能を担わなくなったということは、一方ではこうした抑圧が緩んだ状況ともみることができる。このことに関連して坂本義和は、92年以降のポスト冷戦期には、世界政治システム国際権力の相対化、イデオロギーの相対化、争点の相対化という3つの相対化が発現し、市民領域の重要性が増大していると指摘している(坂本、1997)。ここでは、抑圧のシステムとしての国民国家体制と、これを前提としていた世界政治システムが変容するなかで、社会の領域がより重要性を持っていることが指摘されているといえるだろう。さらに坂本は、20世紀型の絶対的価値の相対化の根本には人権概念や平和主義などの普遍的価値が存在していることを指摘している。これは平野氏の言う「グローバリゼーションに伴うよい変化」と内容的に響きあうもの

であるが、20世紀型社会システムの相対化のなかで、改めてこうした価値が明確に現れるようになってきているといえる<sup>3)</sup>。こうして考えてみると、トランスナショナルからグローバリゼーションへという流れのなかで存在感を増した社会において、普遍的価値と多様な文化をどのように組み合わせるのが、改めて問われることになるように思われる。この点は、権力システムとしての国家、経済システムとしての市場とに対抗するものとしての「市民社会」の重要性というテーマとして論じられることが多いが、人々の生活領域に広範に関わる文化領域においてもテーマ化される論点なのである。

## 2.2 文化の再発見と受容：阿部氏の講演をめぐって

阿部氏の講演は、環境をテーマとして、アメリカ先住民がアメリカ社会で置かれている状況を踏まえつつ、彼/彼女たちの持つ自然観を紹介し、その意味と意義を検討している。これは平野氏の提起した文化領域における社会の対抗性を具体的に検討したものと位置づけることができるだろう。

阿部氏はまず、1970年代以降のアメリカにおける環境運動、環境意識の高まりのなかで先住民の伝統的な思想がかなり大きな貢献をしていることを指摘する。特に、西海岸で勃興してきたニューエイジ・ムーブメントと結びつき、先住民の自然観が、白人社会の中でも再発見されてきたという。この自然観の中心にあるのが「基本的には、私たち人間は大宇宙の生命連鎖の円環上に位置する一つの円環に過ぎない」という考え方である。これは、欧米社会の「人間を頂点とした垂直的な社会構成」とする社会観とは大きく異なるものである。

しかし、先住民はこうした自然観のなかにいる一方で、核のゴミをはじめとする有害な廃棄物の処分場や迷惑施設の立地先としてマイノリティの共同体が狙われ、そこでは大きな被害が出ている。こうした環境レイシズムが今日でも大きな問題であることもあわせて指摘している。

阿部氏の指摘したアメリカ先住民の自然観は、近代社会の支配的な価値観である欧米社会のそれと対極にあるものである。この自然観がアメリカの白人社会に注目されるようになったのが70年代であるという指摘は興味深い。平野氏はインターナショナルからトランスナショナルへという近代国家の変質が始まったのは70年代であると指摘している。この時期、近代国家の外へ向かう方向への変化が始まるとともに、近代国家内部での変化もまた出現しているのである。そしてまた、ここで見出された価値観が新たに発明されたものではないということにも着目する必要がある。それは、近代国家による国民の統合のなかで、社会的に周縁に位置づけられ、差別の対象となっていた人々の価値の再発見なのである。その意味では、アメリカにおける先住民の環境観への着目は、近代国家の変質のなかで、それまで抑圧されていた文化が顕在化したものと考えられることができるだろう<sup>4)</sup>。さらにいえばこうした環境観への着目は、世界全体で支配的なものとなっている西欧に由来する近代的価値観の再検討を迫っているのである。

この際に問題となるのは、ここで顕在化した文化をどのように理解するのか、という点であるように思われる。阿部氏はチェロキー族の俳優アイアン・ヘイズが、本来被らない羽根冠をかぶって環境破壊に反対するメッセージをテレビが流すというステレオタイプの存在を指摘している。こうしたステレオタイプの問題は、単に文化の無理解として捉えられるのみならず、異文化をどのように理解するのが問われるであろう。ここでのステレオタイプはマジョリティの人々にとっての通俗的な「インディアン」のイメージが現れているが、これは、先住民の自然観が、マジョリティである「白人」の持つ文化の枠組みにあわせて、理解されようとしているということを示している。しかし、根本的な発想の異なる文化のありようは、こうした捉え方で理解することはまずできない。

この対極にある捉え方として、自らの文化とは異なる文化を単に違うものとして理解する方向がある。この捉え方は異文化をとりあえずはそれ自身として捉えうる方向ではあるものの、それは自らの生きる世界に対して影響を及ぼさない「遠い世界」としての理解にとどまる危険性が高い。この意味では異文化を、自らの生きる文化とは異なりつつ、自らの生きる世界に関わるものとして理解する方向性を考える必要がある。こうしたことはどのように可能なのか。それはおそらく、日々異文化接触の繰り広げられる生活世界での実践のなかで模索されるべきものであろう。その典型的な場所として都市を位置づけることができる。

### 2.3 多文化接触の現場としての都市：町村氏の講演をめぐって

町村氏の講演は、エスニシティをめぐる都市の状況を、新宿での調査データを踏まえつつ検討したものである。

まず町村氏は、都市における多文化状況を捉える中心的なテーマであるエスニシティについて、これが様々な差異の一つであること、そしてエスニシティを強調しすぎると、他の差異が見えなくなってしまうことに注意を喚起している。また、エスニシティは、「ホスト社会における多数派を占める支配層によってしばしば直接的あるいは間接的にコントロールされる」ものである一方で、マイノリティの越境者も戦略的にエスニシティを創造しているのであり、こうしたことからエスニシティは自然に生み出されるのではなく「移動する人間、越境する人間は、移動した先において元の文化を変形させながら新しい文化を創り上げていく」という。

その上で、グローバリゼーションの時代における都市の役割を「市民社会の共通の資本あるいは共通の基盤」となることに求めるが、ここでの市民社会は「移動していく人間たちが国籍とは関係なく市民としてつくりあげていく」社会であり、都市がその器としての役割をいかに果たすのか、

そしてそのなかで文化がどのような可能性を持っているのかを考えることが必要であると指摘している。

町村氏の議論は、ホスト社会とマイノリティという関係のなかでの、具体的に異文化が顕在化している都市をめぐるものであるということが出来る。このような状況下では、都市に生きる人々は否応なく異文化と触れる経験を持つことになる。ここでは、異文化に対する「気付き」が発生する。とりわけ、日本の都市においては80年代以降のニューカマーの来住に伴うエスニシティの顕在化は、それまでの日本社会が均質な社会であるという幻想を打ち砕いた。そしてここからは、在日朝鮮・韓国人の存在をはじめとするそれまで十分にはその存在が認識されなかった多文化状況への関心をも引き起こしている（高木、1997）。ここで都市はグローバリゼーション下での多文化状況を実践・体験するレッスン場となったということが出来るだろう<sup>5)</sup>。

しかし、町村氏の指摘はここでの文化とは何かという点を問うている。エスニシティは移動者が移動してくる以前に保有していた文化そのものが固定的に現れるのではなく、ホスト社会の統制管理と移動者自身の戦略的創造によって生み出される、いわば変容した文化なのである。移動者について考えて見ると、こうした戦略的創造は、生活上の危険やトラブルを避けるため、あるいはエスニシティの商品化を通して経済的な利益に結びつけるため、さらには自己のアイデンティティのため、等々のさまざまな動機があると考えられるが、いずれにしてもこうした「生き抜き」の戦略として自分自身を提示していくのである。こうした戦略がなにがしかの有効性を持つためには、それが受容される状況が必要である。今日の日本の都市では、こうした戦略が、少なくとも可能性として有効性を持ちうる状況が生まれていると出来る。

一方、ホスト社会の側からすれば、こうした文化をどのように受け入れるのが課題となる。こ



ここでは異文化を自らの文化へと同化させることなく、受け入れていくことが求められているように思われる。これは規範的にそうすべきであるということではない。平野氏が指摘しているような近代国家の変質、あるいは阿部氏の提起した環境をめぐる問題に見られるような近代の価値の揺らぎからすれば、これまでとにもかくにも近代国家（さらには近代社会）のありかたを基盤としていた同化・統合が現実問題として成立しにくくなっていると考えられるからである。現代文化の葛藤がこのような価値の揺らぎの下で発現している事象であるとするならば、この葛藤は旧来の価値に代わる、新たな価値を生み出すための過渡的現象として、ある種の積極的意義を見出すことも不可能ではない。そしてここで生み出される新たな価値とは何かについて考えることが現代文化を見据えるための視点となるように思われる。

#### 注

- 1) 3氏の講演は本号に掲載されているので、そちらを参照されたい。
- 2) 田房氏のコメントは、自身のアメリカにおけるベトナム難民研究を踏まえてのものであった。平野氏に対しては、アメリカにおけるベトナム難民については、ホスト社会との葛藤が少ない一方で世代間の葛藤がみられるが、これを国際関係論の立場からどうとらえるのかについて質問があった。平野氏からは必ずしもディシプリンにこだわった視点は必要ないと指摘した上で、同化・適応をどのように捉えるのかについて検討する必要があるとの回答があった。また、町村氏に対してはアメリカ社会ではエスニックの提示に危うさがある、例えばコリアンの人々がハンゲルを看板等で使用することに反発があるが、こうしたことはないか、という質問がされ、町村氏はこれがあるだろうという回答だった。さらに阿部氏に対しては、先住民の価値が環境運動に対するバックボーンになっていることについて、先住民の側からの

自発的な働きかけはないのか、という質問がされ、阿部氏からは先住民の環境会議はこうした自発性の現れのひとつであるとの回答があった。

- 3) ただし、この普遍的価値については一定の留保が必要である。中野敏男は、坂本をはじめとする、国家を社会（市民社会）の普遍性に依拠して乗り越えるという考え方について、ナショナリズムと普遍性は根本的に対立するものではなく、むしろ歴史上、普遍性がナショナリズムと結びついてきたことを指摘する（中野、1999）。このような視点に立つならば、今日言われている「普遍性」もまた、絶えざる検証のなかに置かれる必要があるといえる。
- 4) 言うまでもないが、こうした国家内部の多文化の顕在化は、アメリカ先住民の特殊な事例ではない。例えば日本においては沖縄やアイヌ民族の問題、さらには水俣病をめぐる体験はこうした事例として位置づけることができるだろう。
- 5) このことについて町村氏は、異文化の接触では、お互いに関心をもつこととともに、過剰にかかわらないことの重要性を指摘した。

#### 文 献

- Anderson, B., 1991, *Imagined Communities*, revised and extended edition, W. W. Norton & Co. (= 1997, 白石隆・白石さや訳『増補 想像の共同体』NTT出版)
- 中野敏男、1999、「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』27巻5号（1999年5月号）pp.72-93
- 坂本義和、1997、『*相対化の時代*』岩波書店
- 佐々木正憲、1998、「新しいソシエタルパラダイムとしての現代市民社会」八木紀一郎他編『*復権する市民社会論*』日本評論社、pp.3-25
- 高木恒一、1997、「都市の多様な生活世界とアーバン・エスノグラフィー」奥田道大編『*都市エスニシティの社会学*』ミネルヴァ書房、pp.229-242